くすり博物館だより

VOL. 51
平成16年(2004)5月

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY

内藤記念くすり博物館
〒501-6195 岐阜県羽島郡川島町竹早町1
Tel:(0586)89-2101 Fax:(0586)89-2197
http://www.eisai.co.jp/museum/

常設展を展示替えしました

テーマ特集◆ 楽しく　わかりやすく

◀白沢　48×115　江戸時代
中国の想像上の神獣で、9個の目と6本の角を持ち、人の言葉を理解すると信じられてきました。また古くから、白沢の図を懐に入れておくと、災難や病気をまぬがれると言われていました。展示室の入り口に展示されています。

常設展の展示替え

―入館者の視点で、より楽しく　よりわかりやすく―

常設展示は博物館の顔とも言うべき主体をなすものです。博物館によって、常設展示を定期的に展示替えしているところもあれば、ほとんど実施していないところなど様々です。当館の場合は、昭和61年（1986）に新館が増築された時、展示の主体を新館に移しましたので、必然的に常設展示の根本的な展示替えになりました。その後は、マイナーチェンジは別として、大幅な展示替えは実施してきませんでした。

昨今、多くの博物館・美術館において、入館者数の漸減傾向が問題視されています。その原因のひとつには、一般の方のニーズや興味の変化に対して、博物館側が無関心すぎた点にあると思われます。今や、単に展示品を見せる博物館から、経験してもらう博物館、観て楽しい博物館へと脱皮を図らないかぎり、その傾向に歯止めをかけることは困難です。由緒ある国立博物館も独立法人化され、従来に増して集客力のある展示を企画する必要に迫られ、知恵を絞っていると聞いています。

そのような状況にあっては、常設展示といえどもマンネリに陥ることは避けなければなりません。特に、リピーターの方に「何度観ても楽しい、面白い」と思っていただけば理想的です。この度、当館も「入館者の視点で、より楽しく　よりわかりやすく」をコンセプトに、学芸員を中心に議論を繰り返し、昨年末から展示替えを実施しました。具体的には、展示ストーリーの全面的な見直し、不十分な部分に展示資料を補足したことがポイントです。

例えば、「薬入れ」のコーナーでは、大きな百味箪笥から小さい印籠・きんちゃくに至るすべてを一堂に集め、使用目的に応じて工夫されていることを理解できるように配置しました。また、神農像と『神農本草経』、葛根湯と『傷寒論』、経絡人形と『黄帝内経』のように、資料と図書を併行展示することにより、関連をわかりやすくしました。パネル・キャプション（説明板）も一新しました。

果たして、意図したところが達成できたかどうか確証がありません。皆様の目でリニューアル後の常設展示をご高覧いただき、率直なご感想・ご批判をお寄せいただければ幸いです。

館長　篠田愛信

健康への願い

常設展の最初には、色鮮やかな郷土玩具や絵馬が並んでいます。「くすり博物館になぜこんなものが？」と思われる方も多いかもしれません。

昔は、郷土玩具や絵馬の多くは、病気の苦しみや恐怖から逃れ、健康になりたいと神仏に祈り願うためのものでした。

▲『神農本草経』森立之著

▲ 神農像　19×27×37
古代中国の医薬の神で、人々に草木の薬効を教えたという伝説があります。

▼『傷寒論』
張仲景著　王叔和撰次

▶ 犬張子＆ざるかぶり犬
12×21×32
犬が安産であることにあやかって、こどもの安産、無事成長を祈願します。

▼ 萩日吉神社の猿　4×4.5×9／3×3×7
木製　埼玉県
萩日吉神社
こどもの悪いところを木猿に刺して、病気平癒のまじないにします。厄災が去るとされ、小児虫封じ、腹痛平癒になるといわれています。

◀ 蘇民将来　26×6×2
愛知県　洲崎神社ほか
疫病よけの神。茅の輪をかかげて疫病をよけさせました。六角で塔状の護符はヤナギ製です。

▲ 葛根湯の生薬
葛根湯は風邪薬としてよく知られている漢方薬です。葛根（カッコン）・甘草（カンゾウ）・生姜（ショウキョウ）などを配合したものです。

▲ 経絡人形
17×50
東洋医学で、身体の中のエネルギーの通路（経絡）と要所（経穴）を表した人形。

▲『黄帝内経素問』
王冰注　林億等校正

資料の説明は、資料名／薬の製造元／薬の販売元／製造元の所在地・販売元の所在地／年代／サイズの順に記しました。サイズの単位はcmです。データのない部分は省略しました。

東洋医学

5世紀頃から半島（新羅・百済）や大陸（隋・唐）の文化が伝わるとともに、留学僧などによって医学の知識ももたらされました。

江戸時代には、多くの医薬書が中国から輸入されて日本でも類似の書物が出版されました。特に『本草綱目』の渡来以後は、日本独自の本草書が数多く著されました。しかし、江戸中期に蘭方医学が導入され、その影響を受けて中国とは異なった発展をしました。博物学や植物学的な科学知識が取り入れられて、徐々に近代的なものへと移り変っていきました。

くすり博物館では、図書室に数多くの医薬書を収蔵しており、常設展でもそのうちのいくつかをご覧いただけます。

蘭方医学

蘭方医学とは、オランダから入ってきた西洋医学のことです。日本は17世紀にポルトガル、オランダとの交易を始めましたが、その後鎖国政策をとり、わずかに長崎・出島を窓口に西洋の文物がもたらされるだけでした。しかし医学者はこのような状況下で西洋医学をどん欲に吸収していきました。

常設展では、翻訳・研究された当時の書物や解剖図、“おらんだ徳利”と呼ばれるガラス製の薬瓶類などの蘭方医学に関する資料を中心に展示しています。

▼ 九臓全面図
山脇東洋の著した日本で最初の解剖書『蔵志』を写した図と思われます。

◀ おらんだ正月
寛政６年（1794）閏（うるう）11月11日、太陽暦の元旦にあたる日に、大槻玄沢が蘭学者を集めて催した宴の様子を描いたものです。

▶ 尾張藩御典医の駕籠　160×290
高橋家は初代玄仙が享保４年(1719)尾張藩６代藩主継友の侍医として仕えて以来、明治に至るまで御典医（ごてんい）を勤めました。これは高橋家で大切に残された駕籠で、登城（とじょう）の時に使われたものです。

薬箱を携えて

◀ 往診用薬箱
明治17年（1884）/
16×20×16

常設展では、形や構造、素材もさまざまな薬入れを同じコーナーで見ることができます。

中でも医師が往診時に使用した薬箱には、常用の薬と、薬さじや薬包紙、それを押さえる圧尺（あっせき）などが納められ、面白いものです。明治時代以降は薬の入れ物がガラス瓶に変わり、重みに耐えられるようしっかりした造りになりました。

おくすり今昔

往診と家庭看護

病気の時には、「もうじき先生が来てくれるからね」という母親の一言が実に頼もしく感じられました。特に高齢者や幼いこどものいる家庭では、“お医者さん”の往診は実にありがたいものでした。

江戸時代以降は大名や公家、富裕な商人階級だけでなく、一般の人々も医師の元へ診察してもらいに行くだけでなく、往診もしてもらえるようになりました。近代になると聴診器や打診器、体温計などの診断器具類も発展し、往診のときには、医師は診断器具、注射器や薬品を鞄に入れて持参しました。

戦前までは、病気のときはまず、家庭で治療・看護しました。そのため、吸入器や氷のうなど家庭での治療・看護に使う器具や、家庭用薬箱などを備える一般家庭も現れました。

現在では、電子体温計をはじめ、発熱時に体に貼る冷却シートなど、機能性の高い製品が手軽に入手できます。昔、家庭で使用した看護用品や治療用具などは今のものと比べればはるかに使い勝手の悪いものでした。しかし当時としては貴重品だったため、大切に保管され、現在まで残ったのでしょう。

学芸員　稲垣裕美

▼ 第二次世界大戦中に用いられた紙製氷のう　14×14
氷のうつり　35×7

▲ 明治時代の往診用かばん
18×28×７
打診器　17×3.5
聴診器

薬草園から

初夏の香り～カモミール～

春から初夏にかけての薬草園を飾る花のひとつにジャーマンカモミール（カミツレ）があります。ジャーマンカモミール（Matricaria chamomila）は、ヨーロッパから西アジアに分布する一年草で、花には甘酸っぱいリンゴを思わせる香りがあります。雨上がりの薬草園を歩くと、ほのかにカモミールの匂いが香り、とてもよい気分にさせてくれます。

カモミールは古代エジプト時代から薬用として使われていました。ヨーロッパでは、現在でも風邪をひいたらカモミールというぐらいに家庭薬として親しまれています。カモミールの頭花（ここでは花全体とします）には発汗作用の他、消化不良、炎症を抑えるなどの作用があるとされています。また、精油を含むため香水、シャンプー、リキュール、タバコなどの香り付けに利用されます。

気軽に利用できる利用方法のひとつにカモミールティーがあります。舌状花（花びら）が垂れ下がり始めた頭花を摘み、陰干しにしたものを使います。市販のティーパックにいれ、後は熱湯を注ぐだけです。ハチミツを少量加えるとまた違った味も楽しめます。

カモミールの栽培は排水や日当たりのよいところであれば簡単に育ちます。ただし、あまり肥料を与えすぎると茎ばかりが伸び花数が少なくなってしまうので注意が必要です。種をまく時期には春まきと秋まきがありますが、この地方では通常秋まきです。また、こぼれ種でもよく増えます。

なお、よく似たものに多年草のローマンカモミール（Anthemis nobilis）があります。区別の方法としては花床（花の内部）の断面を見たときにジャーマン種は中空（空洞がある）ですが、ローマン種は空洞がありません。また、こちらは、花だけでなく茎や葉からもリンゴのような香がすることからも区別できます。

カモミールティーを飲みながらお気に入りの本を読む・・・。たまには、そんなのんびりとした時間の過ごし方はいかがでしょうか。

薬用植物園　亀谷芳明

とぴっくす

新収蔵資料を紹介します

■秋のリース教室　大盛況でした

夏休み親子教室で薬草のリースが大変好評で、「ぜひ大人向けのリース教室も開催してほしい」という声が多かったことから、木の実が多い秋に開催しました。

当日は薬草園友の会に所属されているボランティアが指導・アドバイスを行い、女性を中心に２日間で100名を迎え、熱気あふれる３時間でした。

■植物画ギャラリー　オープン

２～３月にかけて毎年実施する植物画講座作品展ですが、今年は本館の大ホール前のスペースで開催となりました。27名の力作を展示しました。終了後は植物画ギャラリーとして、植物画講座講師・逸見誠三郎の作品を展示中です。今後は、受講生の作品を交代で展示させていただく予定ですので、お楽しみに。

■主な購入資料

健通丸の看板は、モダンな女性の絵柄と星型のデザインに特徴があります。ポスターは滑川の薬局のもので、凝ったデザインとなっています。是斎は大阪・天下茶屋で売られていた薬で、店の様子が描かれたちらしは江戸時代のものです。３枚組の錦絵は「父母の恩を知る図」で、母体内での胎児の様子を描いたものです。

■主な寄贈資料

京都・端野博康先生より、戦前のライツの顕微鏡一式をいただきました。お父様が大正～昭和初期にかけて使用されていたものとのことです。

◆◆資料・図書ご提供者ご芳名◆◆

会田輝代　河野亨　高橋雅夫
武田科学振興財団　端野博康
松木明知　水橋薬業会
ﾐﾋｪﾙ･ｳﾞｫﾙﾌｶﾞﾝｸﾞ　渡邊武　黄龙祥

～ありがとうございました～

（敬称略／五十音順）

HP「くすりの博物館」へどうぞ

昨年開催した企画展「くすりの広告文化―看板・錦絵広告・ポスターの世界―」で展示した資料の中から、特に面白い資料を選んで「見てみて！くすり広告」内で詳しく紹介しています。

また、今年は「内藤記念くすり博物館のご案内」のページで、ご来館時の交通機関やイベントの紹介などを今まで以上にわかりやすくしました。ホームページをご覧になったら、次はぜひ実際のくすり博物館へお越しください。お待ちしています。

http://www.eisai.co.jp/museum/

内藤記念くすり博物館

開館／９：００～１６：００
休館／月曜日
　　年末年始(12/28～1/8)
館　長　篠田愛信
学芸員　稲垣裕美(編集担当)
学芸員・司書
　　野尻佳与子・伊藤恭子
庶　務　森田麻起子
　　小島敦子(見学受付)
薬用植物園(栽培管理)
　　苅谷辰行　栗本裕康　亀谷芳明
顧　問　青木允夫
アドバイザー　逸見誠三郎